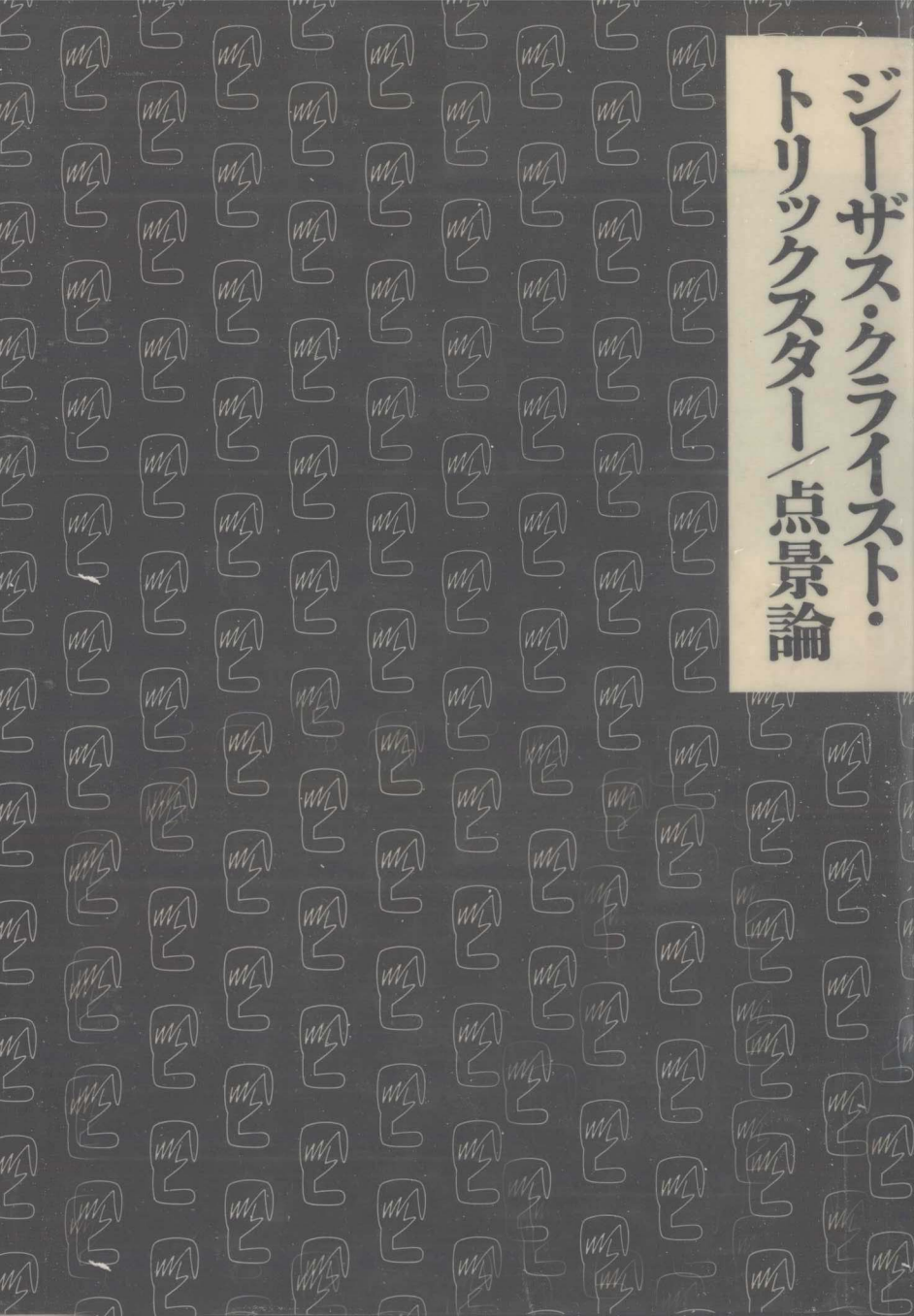


ジーザス・クライスト・  
トリックスター―点景論





筒井康隆全集 24

ジーザス・クライスト・トリックスター  
点景論

新潮社

ジーザス・クライスト・トリックスター

筒井康隆全集 第24巻

昭和六十年三月二十日 印刷  
昭和六十年三月二十五日 発行

定価一五〇〇円

著者 筒井康隆

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一(〒一六二)

電話 業務部 東京(〇三)二六六・五一一

編集部 東京(〇三)二六六・五四一一

振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小  
社通信係宛御送付下さい。送料小  
社負担にてお取替えいたします。

© Yasutaka Tsutsui 1985 Printed in Japan  
日本音楽著作権協会(出) 許諾8462193-401号

ISBN4-10-644424-0 C0393

筒井康隆全集第二十四卷・目次

短篇

通過儀礼……………11

句点と読点……………12

東京幻視……………13

言葉と〈ずれ〉……………20

きつねのお浜……………28

点景論……………42

追い討ちされた日……………55

シナリオ・時をかける少女……………61

戯曲

ジーザス・クライスト・トリックスター……………69

ジス・イズ・ジャパン……………90

人間狩り……………102

エッセイ

現実と超現実の  
居心地よい同居……………119

対話形式で進行する  
エロスと革命の機杼……………121

私のオールタイムベスト	10
情景描写とミステリー	126
鷺鳥番の少女	127
序——イントロデューシング・ ヨースケ・ヤマシタ	131
『ピアノ弾きよじれ旅』 解説	135
ジャズ	137
最初の記憶	138
ユング「文芸と心理学」 をめぐって	139
パロディと虚構性	141
『唐獅子株式会社』解説	143
マリオ・バルガス・リョサ の『緑の家』	151
SHINCONの思い出	152
夢—もうひとつの現実 (虚構)	153

商品としての教養	193
現在の平均的一日	208
幕間礼讃	212
演劇とトリックスター	213
超虚構宣言	216
川和さんのこと	218
突然こういふところへ何で もいふから書けと言われて も困ってしまう	219
創作作法以前	220
言語感覚とメディア	227
読書日録	229
第二回日本SF大賞 銚衡報告	232
賢治童話の官能	234
しあわせ座長	238

ついに体が動き出した……………	240
住み方の記……………	242
幼児期の記憶への固執……………	242
「おもろ」がる精神……………	243
三人の男とひとりの女……………	248
選考委員から……………	250
「90年安保の全学連」を 描いた時……………	250
甲子園の一件……………	251
現代文学かくも豊饒……………	253
A型社会の弊害……………	253
『俗物凶鑑の本』推薦文……………	255
オレが隠し金だししぶった のが運のつきか? ウーン……………	256
プライベート世界史……………	257

限定されない科白 <sup>せりふ</sup> ……………	259
癸亥随想……………	261
マルケス——やりきれなさ の文学……………	261
現代の言語感覚……………	265
いろいろなことをやって いるうちに……………	292
文庫本で反社会的になろう……………	292
極私的大江健三郎論……………	293
『叩いて歌ってハナモゲ ラ』序にかえて……………	297
表現の受容……………	298
文筆と演技……………	301
大一座結成由来……………	303
口上……………	305
あこがれのハードカバー……………	306

年 解	横尾忠則の壮大な宇宙論……	308
譜 説	「悪意」への期待……	309
	第二回国際SFアート大賞 審査員講評	311

	青少年の育成について……	312
	確かにまあ大阪というのは 行きつけの床屋さん……	314
平 石 滋 ・ 編	大江健三郎	316
332		





ジーザス・クライスト・トリックスター

点景論

装  
幀  
  
山  
藤  
章  
二

短

篇



## 通過儀礼

通過儀礼

成長の儀式は苛酷なものであり成人の日にも晴着魔という恐ろしげなものが待ち受けている。そして晴着魔の出現の遠因はといえばまさにその成人の日が発散させている雰囲気内に在るので。成人の日の雰囲気にはエロティシズムがある。この日成人した多くの女性はほとんどが着物を着馴れていない娘たちであり特にこの日のために作った晴着を着るのは当然のことながらこの日が初めてである。晴着が身につかずいわば肌と遊離して晴着は本人と別個に存在する。人物本位に見れば彼女たちは裸だ。閏年の二月二十九日に生まれたため八十歳で成人の日を迎える人たちを除けば、裸の娘と性的過敏症の年齢の男性が成人式という名の下に一堂に会するのだからその雰囲気は所謂健康な色気などといったていものではなくむしろ鬱屈した熱っぽいエロティシズムを息苦しいまでに発散させているのが普通である。これが成人式への往路帰路寄りみち、周囲に影響をあたえて晴着魔の出現を促す。晴着魔たちの眼は語っている。おれには成人の日などなかった。このフォーク&

ロックの、フリーセックスの、ジャック&ベティの、校内暴力済の、びよびよとさえずり続ける者たちにおれのこの剃刀・インク・硫酸の洗礼でもって通過儀礼を施し実社会の暗く重い影を投げかけてやる。また彼らの眼はこうも語っている。おれの娘には晴着を買ってやらなかったがそれは必ずしも買ってやらなかったからではないのだぞ。おれの底にはアフリカやインドで餓えている子供たち、日本人男性相手に売春をしなければ生きていけない東南アジアの娘たちをよそになにが故のピアノ、テニス、ジャズダンス、ゴルフ、バレエ、ヴァイオリンの馬鹿高いレッスン料であるかという思想がおれの家庭の経済状態とはまったく無縁に独立して存在するのだ。だから戦争をしかけてやるのだ。戦争を知らぬ子供たちであったが故に戦争が近づいていることも知らぬお前たちにだ。彼らの眼は大きく見開かれている。時には糸の如く細い。彼らはすべて自らがこれからなそうとする行為のあまりの妥当性に仰天しその仰天と戦っている。時には彼らは大人の知恵から発した自分への言いわけのあまりの突拍子のなさに驚きその驚きを抑圧しようともしている。これはおれの娘だ。おれの娘も今日成人式に出かけている。だが娘はおれのものであって社会や国家のものではない。今日成人式に出席している若い男たちのものでない。だからおれはおれの娘を、あの純粋の処女をおれの手に取り戻すのだ。おれはあんたを愛している。

あんたも愛している。あんたも愛している。あんたもおれの娘だ。あんたもおれの娘だ。あんたもおれの娘だ。あんたもおれの娘だ。あんたも愛しとるのだ。よろしいか。これが大人だ。大人はみんな晴着魔なのだよ。

〔讀實新聞〕昭和五十七年一月十五日号

## 句点と読点

この文章は。と、に関する極めて短い考察であるそもそも昔は。も、もなかったそうであるそれどころか濁点半濁点すらなく改行もあまりしなかったそうであることだから考えるに昔の人は現代人よりも文章の読解力にすぐれていたと言えそうだが現代では。はともかくとして、や改行の濫用によって読みとばしということが可能になったつまり読みとばしをしても充分意味が判読できるわけでありこうしたことがますます現代人の文章読解力を衰えさせているのではないだろうかぼくは一度。はともかくとして、は文章にそもそも必要ないのではないかたいの文章は音読されることはないのだからと考えて意識的に、をすべて省いた小説を書いたことがあるその結果読みづらくてかなわんという意見はひとつもなかったことから大いに意を強くしたものだそこで今度は、どころか。すらない小説を書いてみようと思っているさらにまたそれでもさほど読みづらくないという意見が多ければ本来。や、を打つべきところにも、も打たずとんでもないところに。や、を打った小説を

書いてみようかと思つてゐるただし本来打つべきでないところ。や、を打つたとしてもそれはそれで別のルールに則つていなくてはならない現在その別のルールというのを模索中である何かいい手法はないか

〔週刊小説〕昭和五十七年二月二十六日号

## 東京幻視

松太郎の家は大地主で、松太郎の祖父が早く死んだため父の伊左衛門はそのあとを継ぎ若くして村長になった。松太郎は祖父の顔を記憶していない。父の伊左衛門はしばしば上京した。いつも「大阪の先生」と一緒だった。「大阪の先生」のことを伊左衛門は時おり「阿部先生」とも言った。大男である父が自分のことを阿部先生に「可愛がつて貰うてる」という言いかたをするのが松太郎には奇異に感じられた。阿部先生は衆議院議員であった、と松太郎は父の死後母から教えられた。また「阿部一族」だったとも聞かされた。が、松太郎にはなんのことかわからず、阿部という姓なら阿部の一族のひとりであるのは当然ではないかと思つたりもした。

家に戻ると伊左衛門は家族に東京の話をした。毎年同じような話だったが松太郎は養分を吸い込むようにその話を聞いた。祖母も母も、はや聞き飽きている様子だったし妹はまだ幼ない。父はまず改築されたばかりの豪華な帝国ホテルの話をした。そのホテルでは宴会も行われるというこ



とであった。父はまた銀座の話をした。カフェーというものの話であった。それから洋食店の話もした。

家族は少なかつたが雇ひ人は多く親戚も多かつた。親戚は松太郎の家へしばしば集つた。村内にいる親戚は大人だけでも二十七、八人いた。彼等は集つて酒を飲み唄をうたうのが好きだつた。幅の広い縁側を隔てて裏庭に面した奥の八畳とその隣りの六畳が、間の襖を取りはずして宴に使われた。親戚の者には芸達者が多く踊りを踊る老婆もいた。こうした情景を松太郎は幼い時から父の膝に抱かれて見た。父は松太郎が自慢だつた。妹は宴席に入れなかつた。妹はこまかい用を言いつかつては台所と宴席を往復し縁側からの障子を開いて父に何ごとか伝言する都度宴の賑やかさに眼を見ひらき、しばらくぼうつと眺めていてからあわてて駆け去るのだつた。松太郎とていつまでも宴席にいられたわけではない。座が乱れてきて酔つた男が猥歌をうたいはじめる父は松太郎に「さあ子供はもう寝え」と言つて太腿を大きく揺すりあげ松太郎を立たせた。松太郎はもつと居たいし眠くもならず、そもそもまだ寝る時間ではないので台所へ行く。土間では手伝いにきた男衆や近所の女や女中が十人ほど立ち働いている。祖母と母は女中に混つて板の間で働いている。その間を妹が用もなく動きまわっている。松太郎は板の間にすわつてこれらの様子を眺める。松太郎のためにとりわけてくれた料理の膳を女中が持つてき

てくれる。それを食べながら松太郎は宴席から戻つた女が今誰それが何を唄うてはつた誰がこない言うてはつたなどと話しあつてゐるのを聞く。土間の隅で板の間の檻に腰をかけ遠縁なので宴席には連なれぬ老人がひとり、時にはふたり酒を貰つて呑んでいることもあつた。男衆や女たちのうちで手の空いた者が交代に板の間へあがり食事をはじめの頃になると松太郎はやつと眠くなる。松太郎は板の間でそのまま眠つてしまいたいのだがそれはもう許されなくなつてゐる。幼い頃は女中に抱かれて離れの座敷までつれて行かれたのだつた。妹が板の間の隅に積みあげられてゐる座布団を崩し、その中にもぐりこんで眠つてゐる。松太郎は彼女を起して離れへつれて行く。離れへ行くには宴席と障子一枚で隔つたあの幅の広い縁側を歩いて行かなければならない。八畳の間の明かりと唄声と酒の匂いと笑い声、そして障子には父の大きな背中影が映つてゐる。心を残しながら松太郎は妹の手をひいて離れの座敷へ行く。ふたりが離れて寝るのは宴のある夜だけだ。布団にもぐりこんでも唄声と笑い声は聞こえてくる。それは眠つてからも夢の中にまで侵入してきた。

「わいかて東京行きたい」松太郎は父が東京の話をするたびにそう言つた。松太郎がそう言うたび伊左衛門は「ほたら東京耳したるか」と言つて松太郎をおどかした。「東京耳」というのは子供を東京の方角と思える方向に向けて立